

年収2000万 vs 500万「24時間の使い方」比較

# PRESIDENT

プレジデント

毎月第2・第4月曜日発売 2017.5.15号  
定価690円

仕事も人生も、どんどん楽しくなる!

# 一流の人の 1週間 大 解明

休日に大差!

残業、勉強、旅行、運動、家族……



食事会、習い事……



# 一流人と知り合える場所、 教えます

オフの過ごし方もさまざまだが、どつせならリフレッシュできて、かつハイソな方とお近づきになれば一石二鳥。サラリーマンでも入れるそんな「趣味と教養の場」を取材してきた。

## ワイン

元代議士の経営店で、  
ワイングラスを傾けつつ  
気兼ねない会話を交わす

東京・港区の赤坂通りにある「キノクニ赤坂」は、30席ほどの小さなワインバー。この店で週一回、ワインを楽しむ会が開かれる。弁護士、医師、金融・保険、建築などさまざまな業種の第一線で働く人たちが口コミで集まる。中小企業の経営者も多く、毎回満席だ。ワインはアルコールであると同時に、知的な趣味としても会話のよき媒介となる。参加者の一人、医師の佐藤達雄氏（68歳）は「集まる人の多彩さと、



気兼ねなく語り合える自由さ」に惹かれ、よくこのワイン会に来るといふ。内視鏡診断のエキスパートだが、医師同士の会合にはほとんど出席しない。「同業者とのつきあいだけでは視野が

狭くなる。医者は病気を診るんじゃない。人を診るのが仕事。いろいろな職種の人が集まることは、私のよき勉強の場所だ」と言う。

ワイン会の主催者は、この店を営む木の国酒造だが、その社長は元衆議院議員の東力氏（75歳）。ワイン会は毎回、東氏の短い講話から始まり、食事を楽しむほか、経営セミナーや文化セミナーを加えたプログラムも。この日の話題は、米国トランプ政権の実情。参加者はレアなワインを注いだグラスを傾けながら、氏の話に聞き入る。「ありがたいことに、私の話を聞きたいと言って来られる方が多い」と東氏。議員時代は野次將軍と呼ばれもしたが、同氏は経営学の博士号を持ち、海外の大学の総長を長く務めてもいる。政治経済から国際文化までを広く語り、

## 坐禅

政界・経済界からの  
参禅者が多数。  
心を開いて語り合う

電子宅配便の会社を営む北野謙治氏（54歳）は、10年ほど前から、東京・谷中の全生庵で坐禅会を主催している。開基は山岡鉄舟で、中曽根康弘元首相や安倍晋三首相の参禅でも知られる場所。「利害を離れてさまざまな職種の人が集い、学び合うサロンのような場をつくりたい」との思いからだ。歴代総理の指南役で、政界の黒幕といわれた四元義隆氏（故人）に若い頃から師事、全生庵での勉強会に通っていたが、「よい仲間、よい先輩と出会

高橋盛男=文 初沢亜利=撮影

えるから」と勧められ、自らも仲間と勉強会を催すようになった。

「各界の第一線で活躍されている方を講師に招いて、そのときの最先端の動きを知ろうという趣旨です。それは、今もずっと続けています」

一方で、「講師の話を開くだけではなく、参加者が自由に語り合える場もほしい」と思うようになり、それが坐禅会へとつながった。般若心経を読み、坐禅を組み、住職の法話を聞く。その後、酒と食事の会席になる。

「坐禅は非日常の世界。それによって「心を整える」時間が、メンバーの交流でもとても大切なんです。酒席も普段とは違ったものになりますね。皆が親密に語り合える」

禅とは「自分を捨てること」だと、住職の平井正修氏は言う。そして「今行っていることにのみ、一心に集中す

るのが坐禅」だと。

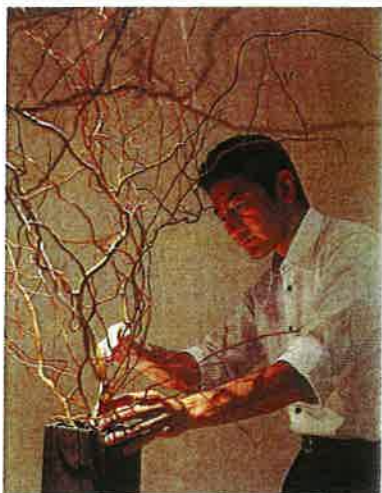
「トップに立つ者は、日々さまざまな判断を迫られる。それは孤独な作業で、何かを断ち切る覚悟が必要になる。そのための心を養っておきたいと、皆さん思われているのではないだろうか」

北野氏は「判断が必要な局面で、私利がからめば判断が歪む」と言う。だから心のトレーニングをするのだと。メンバーの一人で、保育園の運営をサポートする会社を経営する山口洋さん（56歳）は「孤独に耐えて、覚悟をもって判断を下せる心が持てるようになれば」と思っていて参加しているという。全生庵では、毎週日曜日の午後、一般向けの坐禅会を開いている。興味があれば、そこから禅の世界を体験してみるのがいい。

## いけばな

そもそもは「男の嗜み」。  
作品展で互いを知る  
ビジネスリーダーたち

品川のグランドプリンスホテル新高輪内にある「イケバナアトリウム」は草月会師範会理事のいけばな作家、州村衛香氏のアトリエだ。ここで多くの経営トップがいけばなを楽しんでいる。「丸井グループの青井（浩）社長は、息子さんと一緒にいけばなを楽しんで



います。アクセントチェアの程（近習）会長は、昼休みに「30分だけ」と言ってみえられたりもしますよ」と州村氏。いづれも、州村氏が代表を務める「フラワージャパン」の主要メンバーだ。フラワージャパンは、日本文化であるいけばなの国内外への普及を目指すプロジェクト。一昨年からスタートした「ビジネスリーダーたちのいけばな展」では、そうそうたる顔ぶれが出展リストに名を連ねている。

挑戦し、図らずも完走した。そのとき一緒に練習していたチームに、経営者が多かった。州村氏の快挙から、いけばなに興味を持つ人が現れ、やがて人が人を呼んで輪が広がり、フラワージャパンに発展した。昨年の出展者は50名近くを数える。「貴族や武家の社会では、いけばなは男性の嗜みでした。それに経営者もものごとを立体的に捉えられる方々なので上達も早い。皆さん夢中になります」多忙な出展者たちが皆で顔を合わせられるのは、展示会初日のレセプションくらいだ。しかし、各々の作品にじむ人柄を見て、すぐに場が和む。「国内では下火のいけばなですが、海外での人気は高く、日本語の「いけばな」がそのまま通じます」と州村氏。「ビジネスパーソンに、一度はいけばなを体験してほしい」と言う。フェラーリやクルーザーとは縁がなくとも、ハイソな方と同じ時間を共有できる場は意外にあるものだ。P

